

Nameless#02 テキスト02

キーワード・情報

Metaphor item・画面

男、明かりの中に座っている。

日記を読んでいるようだ。

男

「結局のところ、僕は知らなかったということだ。

どのぐらい一緒に居たのか、など、関係なかったのだ。

一緒に居た、ところで、一緒に居なければ、いないのと一緒。ないのと一緒。最初から。

空転する。

簡単に空転する。

そういうものだ。

空転しているからなにもひっかからない。

引っかからないから、苦しくもない。

そういう、ものだ。

まるで、電源を落とすように、あなたは消える。

——消えた。

僕は見つめる。見ている。

じっと見ている。

何を期待しているのか。

何も期待していない

眠る瞬間というのが、最も恐ろしい、君と離れてしまうから」

男、スマホを取り出す。

スマホの明かりに照らし出される男の顔。

画面には『何か』が映し出されている。

男

「見つめる。

消える。

ハッとするような感覚も、あなたは、消える。

すぐに、消えてしまう。いつも。

あなたは。

あなたは姿を変える。いつも姿を変える。僕はあなたを見ている。

いつも、見ていた。

結局のところ、僕は知らなかった。どのぐらい一緒に居たのかなんて関係なかったのだ。居たところで、いなくなってしまうえば、ないのと一緒に。最初から。そうさ。それだけのことだ。それだけの。こと。

でも、あなたはすぐに——」

男、テレビの画面を付ける。

テレビ画面、なにかの映像を映し出すが客席側からは見えない。

男

「どこかに行ってしまうあなたを、引き止めることは出来ない。

あなたはいつもどこかに行く。僕は、ここに居て、眺める。眺めて、いるだけだ。追いつくことは出来ないし、あなたは私を平然と置いていく。

いつだって、そうで。

そうさ。

僕は見なければいい。

でも、いつだって、釘付けなんだ。

釘付けになって、あなたを見ている。

・・・あなたのことを、君、と呼んでもいいだろうか？

そう呼んでも、差し支えないだろうか？

僕は、どうせとあきらめているのに、君に対してなんらかの期待を抱いている。

君はいつもそばにいてくれる、

そういう気持ちになる。そういうことが、君にわかるだろうか？

わかってもらえるだろうか、君に。君は知っているはずなのに、僕をじらすんだ。

いつだって、そうさ。僕はいつも、ずっと見つめているのに。

だから、そう、これは観察に近いのかもしれない。観察する。

僕は君を見ている。見ているんだ」

男、スマホのカメラ機能であたりを撮り始める。

ひとしきり撮り終り満足げに、写真を見つめる。

男

「君はどんな姿にもなる。

どんな姿でも、僕は君に魅了される。

いや、ちがう。君は僕を魅了する為にどんな姿にでもなるのだろう。

嬉しいよ、うれしい。僕のために、君はどんな姿だって演じてくれる。

それはとても、うれしいことだ」

スマホが手から消える。

男 「そして、また、居なくなる。

君の姿を追えなくなる。ずっと見ていたいと思う。
だから、僕は君を、保存する。

大切な僕の机に、君を保存する。君を書庫の中に閉じ込める。閉じ込めて、そのまま、そのままにする。

そのうち、そう、一週間もすれば君のことは忘れる。しかし、君はすぐに違う姿で僕の前に現れる。だから、古い君を捨てる。

そうして、一連の観察が終了する。

そうして、君はまた、僕から離れていく。

そうして、僕は君を見つめ続ける。

それが、僕と、君との関係性なのだし、僕と君との関係性に於いて、それは大変健全であると言えるだろう」

男、にやにやと笑っている。

だが、不意に、なにかの気配に周囲を見回す。

男 「そう、最近、気になることがあるんだ。

気になること。

みんな、見ているんだよ。

僕じゃない。君を。みんな君を見ているらしい。そして、どうやら、君は、いつも新しい君らしい。新しい君には価値がある。だから、君のことをみんな見ているんだ。

ねえ、新しい君とは、どんな姿をしているのだろう。ねえ、新しい君は今この瞬間、僕が見ている君とはどう違うのだろう。僕の見ている君は果たして新しい君なのだろうか。僕の観察は正しいのだろうか？ 僕たちの関係は健全なのだろうか？

君を見つける。

君は離れる。

君を追いかける。

君は振り返る。

君を捕まえる。

君は増える。増える。増える。増える。

君を選ぶ。選ぶ、僕。

君は選別され、君はいくつかに分裂していく。

そして、ある君は正しいとされ、ある君は間違っているとされる。

でも、僕が選んだ君が正しいんだ。他の君は皆間違っている。

だから、僕は君に好かれたと思う。そして、僕の机のいくつもの書庫の中に君をしまいこむ。そして、忘れる。

間違った君を見つけて、僕は罵倒する。君が聞いたことがないような汚い言葉でね。そりゃあ、そういうことはするさ。だって、間違った君はそこにいる理由さえないんだ。

でも、間違った君は一向に消えない。

そこで僕は気が付いたんだ。

君に僕がいるように、君にも僕がいるんだって。

（何かに納得して）そうか、合点がいった。

間違った君は同時に、正しい君であるのか、と。

しかし、理屈はわかってても、どうしても、僕の人柄とか性格がね、それを許さないんだよ。

だから、僕は君を罵倒するんだ。

安心して。

手を出すようなことはしないし、向こうの僕もとても紳士的だから、殴り合いになんてことはならない。第一、僕と僕の間には君が居るんだから、殴り合いになんてなりようがないよ。大丈夫さ。

だから、それはもうすさまじく汚くて見事な舌戦が繰り広げられるんだ。君は幸せだと思っしてほしい。だって、こんな素晴らしい罵詈雑言をそんなに見れるものじゃない。大勢の僕も同時に見ている。時折、僕と僕の言い争いに、別の僕が混ざってくることもある。

本当に、ああいう連中はどうしてあなのだろう。そんなにこの話題を広げたいものなのだろうか。そんなことしてなんになるのだろう？

ああ、もちろん、そういう類の僕がいるということも、僕は承知しているよ。

それは向こうの僕もわかっているはずなんだ。

みんなわかってやっているんだ。

わかっている僕は、それは僕じゃない。ただの、バカなんだ。

バカは僕じゃない。だって、僕はバカじゃないんだから」

男、テレビを見る。

しばらく見つめたのち、再び、日記に戻る。

男

「そう、でも、君はいくらか増えすぎたと僕は思うんだ。

何万人という僕に対して、等しく君は存在している、

ねえ、それってどういうことなんだろうね。

なんで、君は僕のものだけにならないのだろう？
等しく、平等に、君は与えられる。

子供の僕にも、老人の僕にも、バカの僕にも、いいや、僕はバカじゃない。
バカじゃない僕じゃない僕たちほとんどみんな、君を見ている。

逆説的にモノを考えると、こういうことだ、僕たちが君を見ているんじゃない、
君が僕たちを生み出している。

そう、君は、まるで母親のようなモノだ。まるでその通りだ。

君のことを思い、考え、見ている僕たちは、僕たちが君を見ているのではなく、君
を見ることによって、僕という複数の存在を構築している。

違うかい？ いや、きっとそうさ。その通りだろう？

だって、君のことを同時に観察することなんて僕には出来やしない。出来やしない
が、現に、同時に君のことを見つめ、観察し、君について議論し、争う僕たちの存
在がいることもまた事実だ。

そういうことに関して、君はいたいという気持ちを抱くのかな？

君を介して、複数の僕が一個の僕になっていく感覚というのはどういうものなの
だろう？ それは、正しい君なのかな？ 僕にはそうは思えないんだ」

男、唐突に、スマホのカメラで自撮りを始める。

ひとしきり自分のことを撮影する。

男

「ピース、というのはどういう料簡なのだろう。

ああ、僕はね、君、怒っているんだよ。

こんなに簡単に増えることが出来る僕について。君のせいだ。

君のせいで、僕は簡単に増えてしまった。

そりゃあ、楽しいよ。楽しいさ。

僕がたくさん集まってくるからね。こんなに楽しいこともない。

でも、僕は皆一様に、君のことが好きなんだ。

そこに貼ってある君が好きだ。そこに置いてある君のことが好きだ。

集まってくる僕も好きだ。みんな君のことが好きなんだからね。

そう、そうして、こうやって書いている君についての事柄も、僕が書いた事柄も、
君になる。

そうして、君を僕が作り出す。作り出す君を、僕は僕の机の大切な書庫の中にしま
い込む。

そうして、僕は君のことを作り出したのが僕自身だったなんてことはすっかり忘れ
て、そもそも君がそこにいたことさえも忘れる。

僕は君を生み出す。では、僕は君の父親だということなのだろうか？

では、母親は誰だろう？

僕を生み出したのは、君なのだろうか？

僕たちは保存され、複製され、解釈され、論議され、集会を行い、他の僕を罵倒し、公表され、秘匿し、隠ぺいする。

過去のものになり、過去のものは忘れ去られ、そこにいたことさえも忘れ去られる。

そこに、誕生したのは、僕がただ認識したと言うだけに過ぎない。認識以前から君がそこにいたのかもしれない。

どちらにしろ、その感情を表現するなら、こうだ。

見つけた！

けど、その感情も、君に何度も出入りしていくうちに忘れ去られる。

君は摩耗していく。摩耗すると言っても、それは比喩表現だ。

君は肉を持たないし、石ころのような固い体も持っていない。

けれど、君は摩耗するんだ。摩耗して、いなくなる。なくなる。

摩耗とは、見られた数だ。

見られた数の分、古い君は必要がなくなる。

古い君を必要としているのは、古い僕だけだ。

古い僕はいつまで経っても、古い君しか求めない。そう、周りが新しい君の虜になつていたとしても、君と過ごした日々が忘れられないんだ。

君と僕との蜜月は延々と続く。そして、君だけでなく、往々にして、古い僕もいつか消えてなくなる。

要らなくなるんだ。他の多くの僕には必要がなくなる。

そして、君も僕を必要としなくなる。君を作れないから。君を作れないから、僕も君を作れない。観察も、創作も行えなくなる」

男、
静かに。

男

「結局のところ、僕は知らなかったということだ。

どのぐらい一緒に居たのか、など、関係なかった。

一緒に居るところで一緒に居なければ、いないのと一緒に。ないのと一緒に。最初から空転する。

簡単に空転する。

そういうものだ。

空転しているからなにもひっかからない。

引っかからないから、苦しくもない。

そういう、ものだ。

まるで、電源を落とすように、消える。

——消えた。

見つめる。見ている。

じっと見ている。

何を期待しているのか。

何も期待していない

眠る瞬間というのが、最も恐ろしい、君と離れてしまうから」

見つめる。

消える。

ハッとするような感覚も、消える。

すぐに、消えてしまう。いつも。

君は。

君は以前とは違う姿になる。

いや、違う姿になっているのはおそらく僕自身だろう。僕自身の変化が君自身の変化へとつながる。

古い古い古い古い古い僕は、新しいあたらし、あたらしい、あたらしい、あたらしい、君のことが好きになる。興味が移る。

まるで、民族大移動じゃないか！

いつも、見ていた！

けれど、結局のところ、僕は知らなかった。どのぐらい一緒に居たのかなんて関係なかったのだ。居たところで、いなくなってしまうえば、ないのと一緒に。最初から。

そうさ。

それだけのことだ。それだけの。こと」

男、テレビの画面を消す。

スマホの電源を落とす。

男 「消す。

全部、消す。

僕の痕跡も、君の痕跡も何も残すことなく、消す。

何の変哲もない、君にみんな夢中だ。

みんな君を見つめている。

僕は、まだ、君のことを見つめられるのだろうか」